



日本医師会市民公開講座

感染症新時代 見直される予防・治療

シンポジウム・レポート

昨年11月26日、駒込の日本医師会館大講堂で第1回の日本医師会市民講座が開催された。行楽日和の日曜日とあってそれほど出席者が多くないのではないかと心配されたが、坪井日本医師会長のあいさつが始まる頃には大講堂はほぼ埋め尽くされた。

市民講座とはいえ、メモを取りながら非常に熱心に聞いている方が多く、なかば学会のような雰囲気であった。各シンポジストの話が互に関連しながらテーマに沿って非常にうまく進行して感心させられた。後日、森所長に事前打ち合わせが大変だったのではないかと尋ねたが、話の要点を連絡した程度だということであった。司会の松田輝雄さん（元NHKアナウンサー）の技量によるところが大きいと思われる。

地球環境の変化と感染症の関係

国立感染症研究所の竹田美文所長は「南米やアフリカへ旅行する人が年間、ヨーロッパから約1,700万人、アメリカ・カナダから約2,700万人、日本、オーストラリア、ニュージーランドから約550万人に達する。人だけでなく、食材の動きも飛躍的に増加している。そうした地球環境の変化が未知の感染症を持ち込む可能性を高くしている。」ことを指摘され、地球環境の変化が感染症の広がる要因になっていることを総合的に解説された。

結核再燃の兆し

本会結核研究所の森亨所長は、「人口10万あたりの患者発生件数の罹患率で見ると、アメリカの7に対して日本は38であり、先進国の中では一番遅れた状態である。戦前の結核大流行時代に生まれた人々が高齢に達して全体の結核の傾向を左右している。この高齢者からの結核感染が若い世代に伝播してほとんどすべての年齢階層で罹患率の逆転上昇が見られるようになっている。」ことを警告された。

知識ワクチンで食中毒を予防しよう

大阪大学微生物病研究所の本田武司教授は、「生活環境が改善し、衛生教育も行き渡ったはずなのに年間34万人の食中毒患者が報告されており、最近の食傾向が反映している。」ことを指摘され、現在の「細菌性食中毒はサルモネラ、腸炎ピブリオ、病原性大腸菌

など動物性食品が原因となるものが増えているのが特徴である。」ことを指摘され、『菌をつけない』『手をしっかり洗う』『冷蔵庫を過信しない』『加熱を基本に殺菌する』という4原則を挙げられた。

無防備な性行動、性意識

京都大学大学院国際保健学講座の木原正博教授は、若者を中心とする性行動と性意識が大きく変化したことで性感染症の拡大が問題になっていることを指摘された。

「性感染症はクラミジアと淋病が目立ち、男女とも95年ごろから増加傾向にある。症状が出ないことも多く、知らないうちに感染、移してしまう。」という危険な現状を紹介され、情報提供、受診しやすい環境づくり、社会の支援、学校での性教育等の重要性を強調された。



予防接種の果たす役割

国立感染症研究所感染症情報センターの岡部信彦センター長は、予防接種の役割を「すべての感染症を防げるわけではないが、次の世代や社会を守ることにつながる。」ことを訴えられて、「ただワクチンの接種により極めてまれに重大な副作用が起こることがある。その危険性を充分知らせる一方、そのことを国民も知っておく必要がある。」という知識の重要性に触れられた。

最後に、保育園における保母からの結核感染の危険性の判断基準などフロアとの活発な質疑を経て、本会の青木会長があいさつに立ち、「知識の重要性」をベースとする「知識のワクチン」というキーワードを認識できたことで市民講座開催の意義があったと締めくくられた。

（文責編集部）